

愛媛大学教育学部特別教科（音楽）教員養成課程 卒業生の就業に関する実態調査

岸 啓 子

（音楽研究室）

（昭和61年10月11日受理）

はじめに

大学は、自由と独立が保証された学問研究の場であると同時に、その成果を社会に還元することを求められる存在でもあり、教員養成学部においては、義務教育教員の養成機関としての社会的期待と任務が課されている。四国地区の音楽科教員の不足解消と質的向上を目的として昭和34年愛媛大学教育学部に特別教科（音楽）教員養成課程が設置されて以来今年で26年を過ぎ、その間600名以上の卒業生を送り出した。この研究は、愛媛大学教育学部特別教科（音楽）教員養成課程の卒業生が現在に至るまでに教員をはじめとして音楽にかんずるどのような教育的・文化的活動に携わってきたかを、質問紙法によって郵送調査し、その結果をもとに、音楽教育と音楽文化への当該課程卒業生の寄与を明らかにすることを目的としている。

特音課程は資格と免許においては中学校課程音楽と変わるところはないが、中学校課程音楽専攻学生の教員志望率が高率であるのにたいして、特音課程では教員の志望率がこれよりやや減り、かわって専門実技を活かしたホームレッスン、上級学校への進学、音楽教室の講師を希望するものの比率が高くなっている。卒業後の進路についてこれまで実施されてきた調査は、卒業年度における教員採用状況に限られており、教職以外の道を選ぶ卒業生の実態や、就業者のその後の動向については把握を試みられたことはなかった。しかし特音課程設立後四半世紀を過ぎた現在の時点で卒業生の現状を就業状態を中心に調査把握し、その全体的実像を描くことを通して、社会的存在としての特音課程の存在意義をあきらかにすることは、課程の今後のあり方を考えるうえでの大きな手懸りとなるであろう。音楽科教員の慢性的欠乏をかこった時代に設けられた特音課程は、いまや当初予想だにされなかった教員の過剰供給という問題に直面し、一方また民間音楽教育の活況の中で、課程の存在の意味と今後の展望が問われる状況にあるからである。

なお、調査の計画段階において筆者は、特音課程とともに、小学校教員養成課程音楽専修コースならびに中学校教員養成課程音楽専攻の卒業生の追跡調査も併せ考えていたが、両課程卒業生の住所録がないために実現せず、同窓会編の住所録を持つ特音課程だけを最終的な調査対象とするに至ったことを述べておきたい。

・調査方法：郵送による質問紙法。返信用切手を貼った筆者宛封筒を同封し、返送された回答用紙を回収する方法をとった。

・調査対象：特音課程第1期から第21期までの卒業生630名のうち日本国内に居住し、住所の明らかな567名。

・調査日時：昭和60年7月～8月。7月上旬に発送。回答の返信締切りは7月25日頃である旨を質問紙に記したが、実際の締切りは8月15日とした。回答用紙への記入内容は、6月末現在の回答者の状態である。

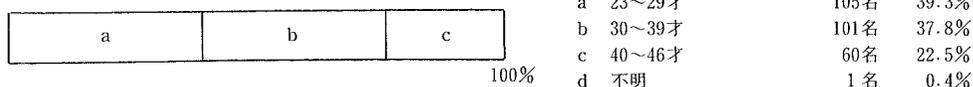
・質問内容：質問は本稿182・183ページに全文を掲げた。質問内容は、1. 就業の状態に関するもの、2. 1以外の社会的・文化的な音楽活動に関するものの2つの領域による構成とし、1においては、調査を実施した時点と大学卒業時の2つの時期に分けて同じ質問を反復し、その職業的活動を卒業から現在へ至る時間の流れの中でとらえることを試みた。

結果と考察

・回答者について

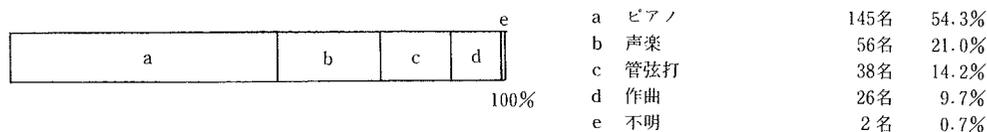
質問紙を郵送した567名中267名の回答を得た。回収率は47.1%である。回答者の男女比は男性25名に対して女性241名で、女性が約9割を占めている。年齢は23才から47才で、20才台105名、30才台101名、40才台60名、不明1名である。

表1



専攻は、ピアノが最も多く過半数を占め、以下、声楽、管弦打楽器、作曲の順である。

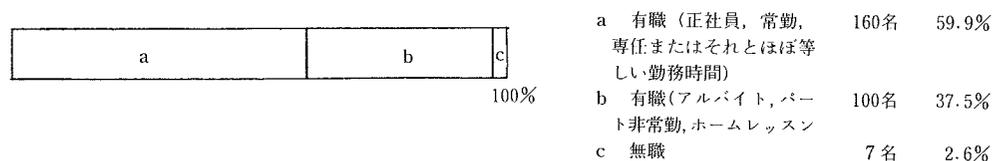
表2



就業状態について

i 卒業時における就業状態（卒業年の6月現在）を尋ねる質問8への回答は、aの専任・

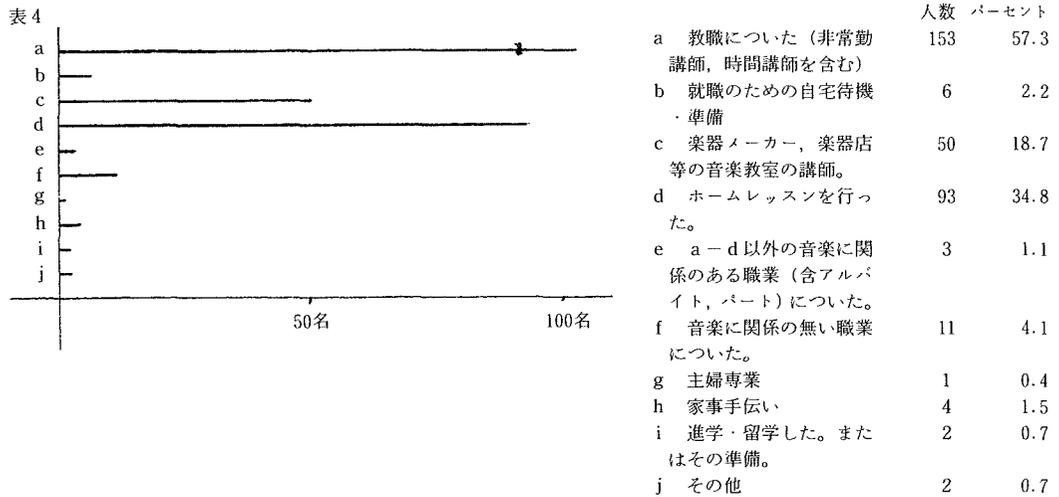
表3



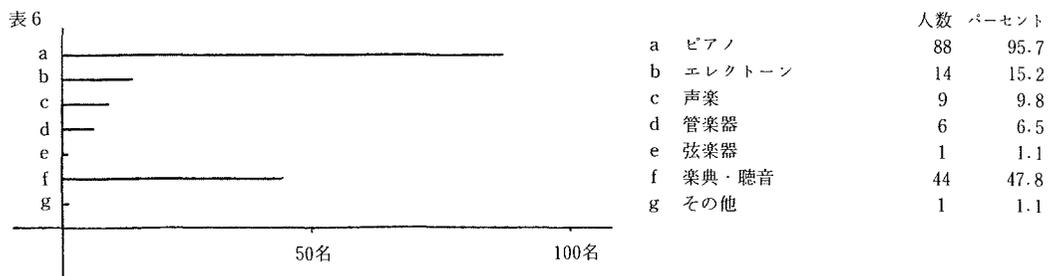
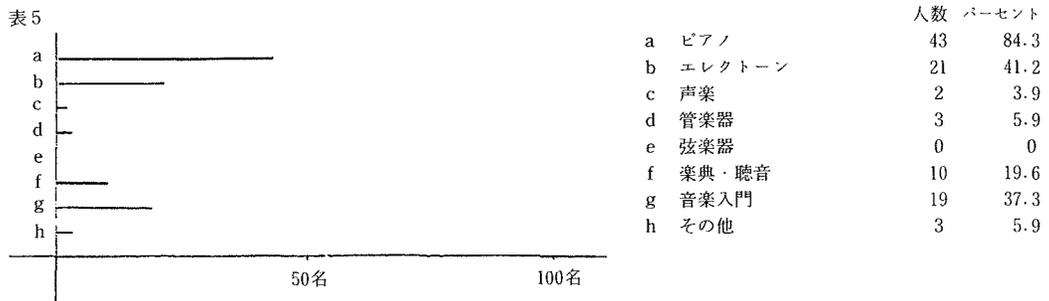
常勤的勤務に就いたものが約6割あり、アルバイト、ホームレッスン等の部分的・非常勤的勤務を併せると約97%になる。これに対して完全に無職のものはきわめて少数である。

就業者（含む非常勤・パート）の仕事の内容は、教職153名（57%）が半数をこえ、ホームレッスン93名（34.8%）、楽器メーカー等の音楽教室の講師の順でこれに続く。

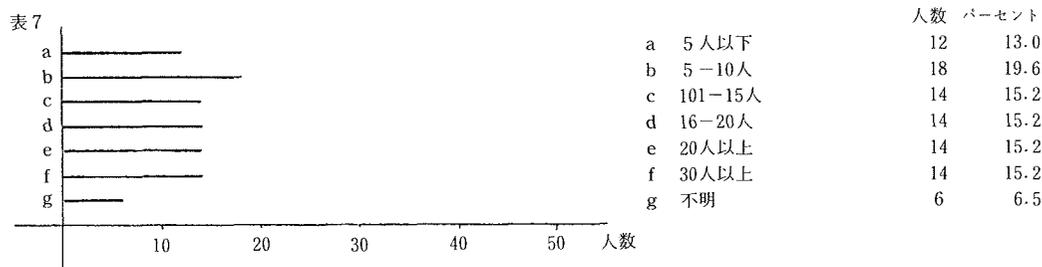
従って、卒業時点ではホームレッスン等も含めた何らかの仕事を持つ人がほとんどであり、仕



事の内容は、教職を中心に、ホームレッスンと音楽教室講師の3本の柱からなっているといえる。ホームレッスンと音楽教室講師の従事者ののべ合計は143名にのぼり、回答者の5割を越えているが、これは複数回答のためであり、教職とホームレッスン、教室講師とホームレッスンを兼ねているためである。ホームレッスンと音楽教室における教授内容（問12, 13）は表5, 6の通りで、いずれもピアノが第1位であり、しかも8割, 9割を越す高率である点が注目される。教授内容の1位から3位は、音楽教室では、ピアノ、エレクトーン、音楽入門、ホームレッスンではピアノ、エレクトーン、聴音・楽典となっている。

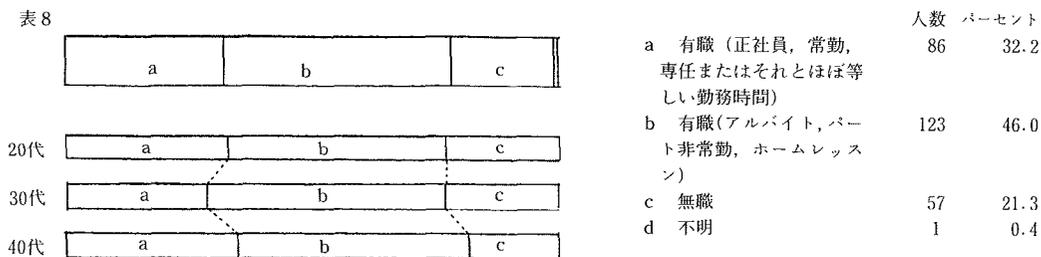


ホームレッスンのレッスン生の数は、5～10人が最も多いものの、5名以下から30名以上までの間に平均的に分布している。

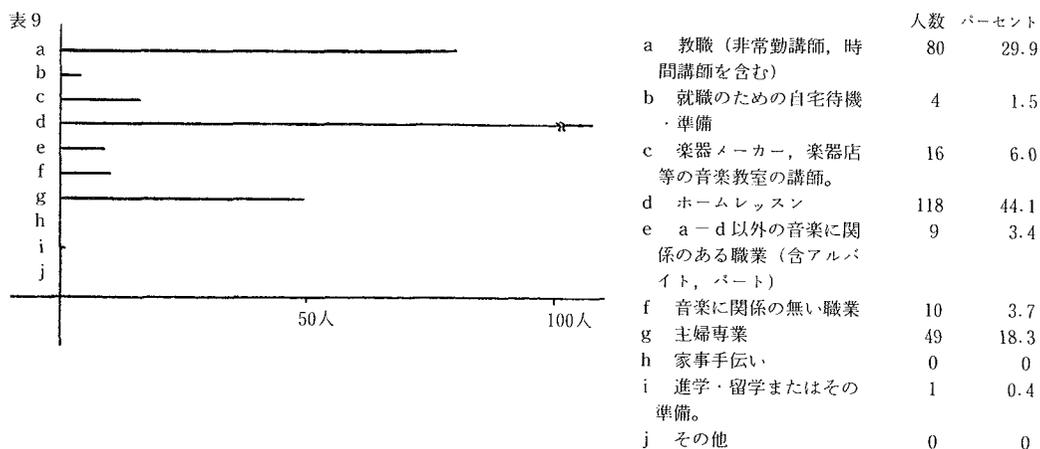


次に昭和60年6月現在の就業状態について調べ（質問22～32）、先の卒業時点での結果との違いをくらべてみたい。

現在の就業率（質問22）は、1位b. アルバイト、非常勤、ホームレッスンで有職が123名46.0%、2位a. 専任、常勤で有職、86名32.2%で、c. 無職が最も少なく、57名21.3%となっている。卒業時点での同じ質問（質問8）と比較するなら、卒業時に1位であったa. フルタ



イムの勤務が2位に後退する（159→86名）一方、b. パートタイム的労働（含ホームレッスン）が増えて1位となり（100→123名）、a, bの逆転現象が認められる。無職（含主婦専業）も大幅に増加している。ここに読み取れるのは、常勤的な勤務に卒業時に就いた後、年数を経



て、非常勤勤務または無職（含主婦専業）へと変わってゆく大きな流れである。就業者（含パートタイム、ホームレッスン）の仕事の内訳は、1位ホームレッスン、2位教職、3位主婦専業である。この結果を卒業時点における同一質問9への回答と比較すると、卒業時1位であった教職が2位に、2位であったホームレッスンが1位へと逆転している。単純計算によれば、卒業年度の153名の教職関係者のうち80名（約52%）がそのまま仕事を続け、73名（約48%）が教職（含非常勤）を退いたということになる。両時点の就業状態にあらわれた最も大きな変化を仮に数字に置きかえてみるなら、卒業年に教職（含非常勤）に就いた100名のうち48名が途中退職し、その中の4人に1人がホームレッスンを始める、ということになる。3位の主婦専業49名（18.3%）の数値には、「花嫁修業課程」という暗黙の批判を感じてきた特音課程にしてはむしろ意外の感を受ける。主婦専業の年代構成をみると、育児に追われる20才代後半から30才台で比率が高まり、49名中37名（76%）が25才から35才の間に集中している。これに対して36才—46才では12名（24%）と低く、この世代では他項目の選択率すなわち就業率がやや高くなる傾向が認められる。ここから家事、育児に時間と労力がかかる期間は主婦業に専念

表10-1

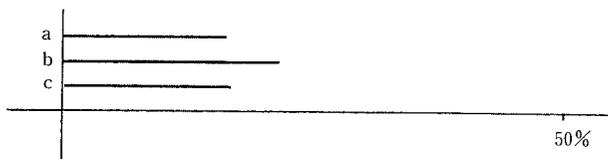


表10-1 年代別 主婦専業選択率、20代、30代、40代のそれぞれの世代におけるgの割合

| | パーセント |
|--------|-----------------|
| a 20才代 | 16.1 (105名中17名) |
| b 30才代 | 21.7 (101名中22名) |
| c 40才代 | 16.6 (60名中10名) |

表10-2

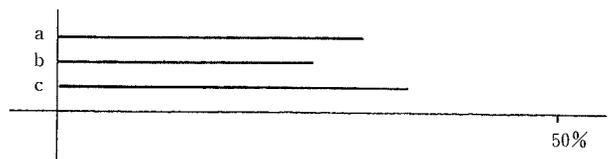


表10-2 年代別教職選択率

| | 人数 | パーセント |
|--------|----|-------|
| a 20才代 | 32 | 30.4 |
| b 30才代 | 25 | 25.7 |
| c 40才代 | 21 | 35 |

表10-3

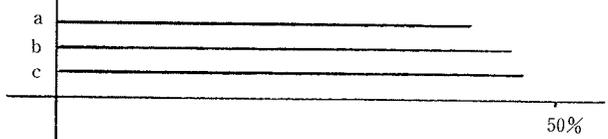


表10-3 年代別ホームレッスン選択率

| | 人数 | パーセント |
|--------|----|-------|
| a 20才代 | 44 | 41.9 |
| b 30才代 | 46 | 45.5 |
| c 40才代 | 28 | 46.6 |

し、子供の成長を待つ仕事を再開するといった女性の生き方が数値の上からも確認される。しかしこれは多数派ではなく、いずれの年代においても——即ち育児に追われている30才台においても、教職、ホームレッスンの回答率が主婦専業をうわまわっている。

楽器店等の音楽教室およびホームレッスンにおける教授内容（質問26、27）は、それぞれピアノが最も多く、以下音楽教室ではエレクトーン、音楽入門ならびに聴音・楽典（同数）と続き、ホームレッスンでは聴音・楽典、エレクトーンである。

ホームレッスンのレッスン生の数は、20名以上30名以下のレッスン生を持つ教師が最も多く、5名から10名、5名以下の順でこれに続く。30名以上のレッスン生を持つものも13名である。卒業時点と比較すると、30名以上のレッスン生を持つものの数がそれぞれ14名、13名と一定している一方（同一人物ではない）、全体としては現時点でより多くのレッスン生を抱えている。

表11-1

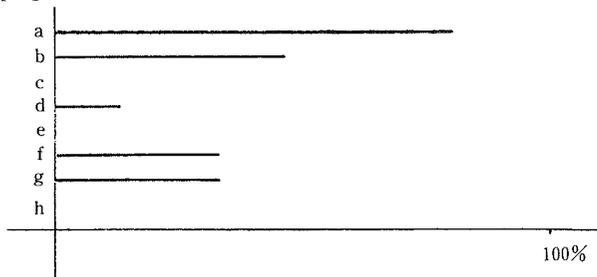


表11-1

| | 人数 | パーセント |
|---|----|-------|
| a | 12 | 80.0 |
| b | 7 | 46.7 |
| c | 0 | 0 |
| d | 2 | 13.3 |
| e | 0 | 0 |
| f | 5 | 33.3 |
| g | 5 | 33.3 |
| h | 0 | 0 |

表11-2

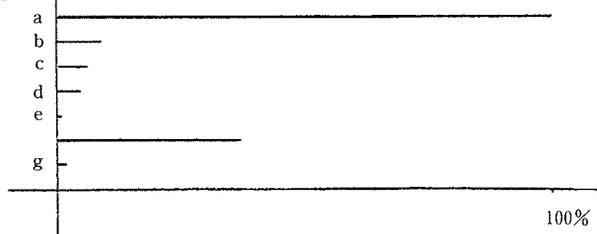
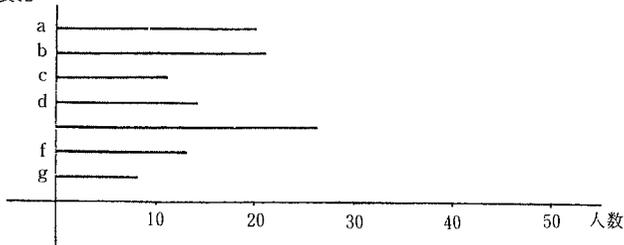


表11-2

| | 人数 | パーセント |
|---|-----|-------|
| a | 113 | 100 |
| b | 10 | 8.8 |
| c | 6 | 5.3 |
| d | 5 | 4.4 |
| e | 1 | 0.9 |
| f | 42 | 37.2 |
| g | 2 | 1.8 |

ホームレッスンを行なっている卒業生の数自体卒業時の92名から113名へと21名の増加となっている。

表12



| | 人数 | パーセント |
|---|----|-------|
| a | 20 | 17.7 |
| b | 21 | 18.6 |
| c | 11 | 9.7 |
| d | 14 | 12.4 |
| e | 26 | 23.0 |
| f | 13 | 11.5 |
| g | 8 | 7.1 |

次に特音課程が設置された本来の目的である教員養成について、両時点の結果を比べながら検討する。卒業年における教職選抜者は153名（57.3%）で、全体の6割弱が一旦教職に就いている。この時点での教職への就業率は、ホームレッスンや音楽教室講師等その他の選択肢を大きくひきはなすものであった。これに対して現時点における教職就業率は1位をホームレッスンに譲って2位に退き、80名（約3割）と卒業年の半数強の人数に落ちている。これは先に述べたように、一旦教職に就いた後、おそらくは結婚・育児のために教職を辞め、ホームレッスンに乗り替えるというスタイルを示しており、またこのスタイルが数の上では相当数あるとすることができる。現業の教職従事者の年代別内訳は、30才台で落ちこみを示しており、この落ちこみは、先の主婦専業率の上昇と補完的關係にあるとみることができる。

教職に関するいまひとつ興味深い事実が卒業時の教職選択（質問9）の比率の変化にあらわれている。卒業年における教職選択率が、40才台68.3%、30才台56.4%、20才台51.4%と年代の低下とともに下降している点である。教員採用者数は、児童・生徒の増減と退職者数の相関によって決まるといふ多分に先方任せの事情があるにせよ、40才台の7割近い高率から20才台

表13 20才台

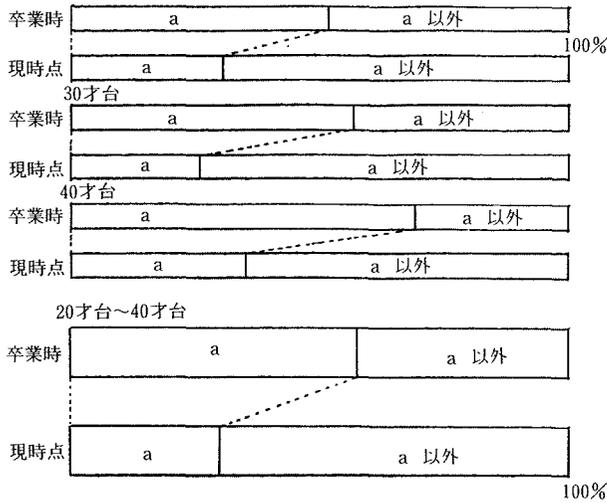


表13 卒業時から調査時点に至るまでの教職就業者の（a 選択者）の変化（減少）

| | 卒業時人数 | パーセント | 調査時人数 | パーセント |
|------|-------|-------|-------|-------|
| 20才代 | 54 | 51.4 | 32 | 30.4 |
| 30才代 | 57 | 56.4 | 26 | 25.7 |
| 40才代 | 41 | 68.4 | 21 | 35.0 |

表14

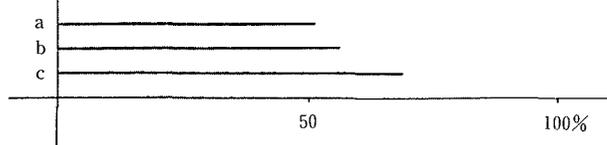


表14 卒業時における教職選択率の年代別変化

| | | |
|---|------|-------|
| a | 20才代 | 51.4% |
| b | 30才代 | 56.4% |
| c | 40才代 | 68.4% |

の5割への減少は、教員養成課程で卒業しても教員にならない・なれない人達の増加を明示しており、この傾向は今後さらに、児童・生徒数の減少と相俟って加速されると考えられる。この教職への就職率の低下を埋める形で増加傾向にあるのがホームレッスンで、40才台、30才台のホームレッスン率が共に30%であるのに対し、20才台で43%と約13%の伸びを示している。

表16

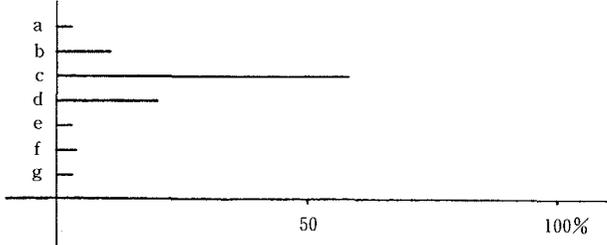


表16 卒業時における学校種別

| Category | 人数 | パーセント |
|----------|---------|---------|
| a | 幼稚園 | 4 2.6 |
| b | 小学校 | 16 10.3 |
| c | 中学校 | 90 57.7 |
| d | 高校 | 31 19.9 |
| e | 大学 | 4 2.6 |
| f | 特殊学級・学校 | 6 3.8 |
| g | その他 | 5 3.2 |

表15

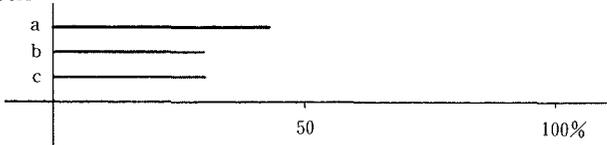


表15 卒業時におけるホームレッスンの年代別変化

| | 人数 | パーセント |
|---|------|---------|
| a | 20才代 | 45 42.9 |
| b | 30才代 | 30 29.7 |
| c | 40才代 | 18 30.0 |

表17

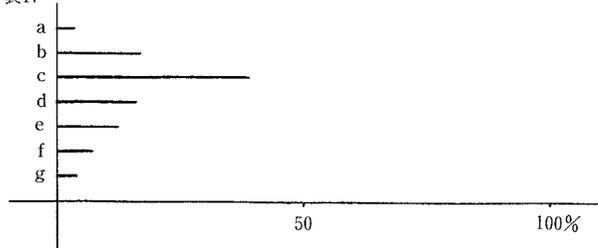


表17 調査時における学校種別

| | 人数 | パーセント |
|---|----|-------|
| a | 3 | 3.7 |
| b | 14 | 17.0 |
| c | 32 | 39.0 |
| d | 13 | 15.6 |
| e | 10 | 12.2 |
| f | 6 | 7.3 |
| g | 3 | 3.7 |
| h | 1 | 1.2 |

教職就業者の学校の種別は表16（卒業年）、表17（調査時点）の通りである。いずれの場合も最も多いものは中学校で、卒業年57.7%、調査時点39.0%である。中学校の他には小学校（卒業年10.3%、調査時17.0%）、高等学校（19.9%、15.6%）が多い。中学校が中心であるのは当然としても、小学校が少ない時でも1割を占めている点が注目される。特音課程が本来、中学校の音楽を担当する教師の養成機関であり、またそれを目的としてカリキュラムを編成、授業内容を組み立てている現実に目をむけるなら、小学校音楽科の授業は当課程卒業生の弱点となっているのではないかと反省させられる。

担当する教科に関する調査 — 質問10卒業年、質問24調査時 — への回答は、10において音楽のみ担当する者が52%、24においては72%であった。これは、新任として赴任した教師の約半数弱が音楽以外の教科を多少なりとも教えなければならない事情にあったことを物語っている。卒業時から調査時点に至る間に音楽科のみへの選択率が2割高くなるものの新卒の段階における他教科の兼担率の高さは注目に値する。これは島諸部や山間の僻地の小規模校が愛媛県には特に多く、それらの学校においては数教科兼担は当然であり、また新卒者の僻地への赴任する割合も高いといわれている県特有の事情にもよると考えられる。

表18

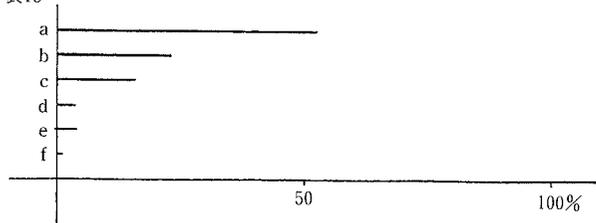


表18 担当教科 卒業時

| | 人数 | パーセント |
|---|----|-------|
| a | 78 | 52.3 |
| b | 34 | 22.8 |
| c | 24 | 16.1 |
| d | 5 | 3.4 |
| e | 6 | 4.0 |
| f | 2 | 1.3 |

表19

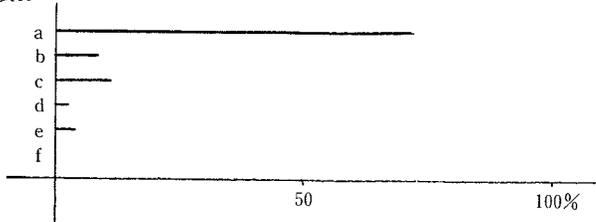


表19 担当教科 調査時点

| | 人数 | パーセント |
|---|----|-------|
| a | 59 | 72.0 |
| b | 7 | 8.5 |
| c | 9 | 11.0 |
| d | 2 | 2.4 |
| e | 3 | 3.7 |
| f | 0 | 0 |
| g | 2 | 2.4 |

新任教師時代に担当する授業科目中に占める音楽以外の教科の比重は若い世代ほど高まり、c. 音楽と他教科をほぼ同じ割合で、d. 主として音楽以外、e. ほぼ全教科の3項をあわせた回答率は、40才台10%、30才台21%、20才台38%とほとんど倍数で増えている。40才台の卒業生の新任教師時代は、特音を卒業していれば音楽の授業に専心できていたのに対し、20才台では音楽のみを教えられる教師と、他教科にも音楽と同様に、あるいは音楽以外に責任を持たなければならない教師がほとんど同数となっている。

表20

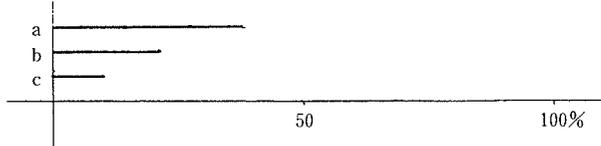


表20 音楽以外の教科との兼担率の年代別推移

| (c + d + e) | 新卒時 | パーセント |
|-------------|------|-------|
| a | 20才代 | 37.7 |
| b | 30才代 | 21.4 |
| c | 40才代 | 10.0 |

音楽に関する課外活動や仕事以外の音楽活動への参加に関する質問（質問37—40）に対し、約半数が参加しているまたは参加経験ありと回答しており、仕事として以外にも活発な音楽活動が展開されていることがうかがわれる。活動内容で特に注目されるものは1位の合唱の圧倒的人気と普及率であり、他県と比較してもおそらくかなりの高率を示しているのではないかとと思われる。合唱以外の音楽活動では、職場に関係のあるサークルやクラブ活動においてブラスが好まれ、職場とは無関係なものではオーケストラが2位となっている。

現在すでに社会人として生きている卒業生が、本学特音課程に学んだこと、大学で得たものをどのように自己評価し、自身の内部に定位しているかを質問39—46において5段階評価で尋ねた。結果は、特音において学んだことへの肯定度が強く、音楽を専攻したことに対する満足感も高い。これら一連の質問に対しては5と4の高い評価がぎわめて多いことが注目される。次にそれぞれの質問について最も多く選ばれた評価の数値と5と4の選択率の合計を記す。

・愛大教育学部特音課程で学んでよかったと思えますか

最多評価4 (56.2%) 5 + 4 83.9%

・大学で音楽を専攻してよかったと思っておられますか

最多評価5 (56.6%) 5 + 4 89.9%

・愛大教育学部特音で学ばれたということと現在のあなたの生活（仕事、家庭、趣味等含めて）は関係がありますか

最多評価5 (53.6%) 5 + 4 87.7%

・愛大特音に過ごされた時代が、その後の人生の基礎となったと感じておられますか

最多評価4 (41.1%) 5 + 4 78.9%

岸 啓 子

特音卒業生の皆様へのアンケート調査

- 実施期間 昭和60年7月15日から7月25日
 回答は恐れ入りますが回答用紙をお願いします。
- 1 性別 a 男 b 女
 2 年令 「 」才 昭和「 」年生
 3 教育学部卒業年月 昭和「 」年 a 3月 b 9月 卒業
 専攻科卒業年月 昭和「 」年3月
 4 専攻 「 」(器楽は楽器名まで)
 5 未婚, 既婚 a 未婚 b 結婚経験あり c 既婚
 6 子供の数 a 一人 b 二人 c 三人 d それ以上
 7 末子の年令 a 0-3才 b 4-6才 c 小学生
 d 中学生 e 高校生 f それ以上
 8 卒業された年の6月頃就業状態についてお尋ねします。専攻科に進まれた方は、専攻科終了年の状態で答えて下さい。
 a 有職(正社員, 常勤, 専任またはそれとほぼ等しい勤務時間)
 b 有職(アルバイト, パート, 非常勤, ホームレッスン)
 c 無職
 9 質問8の回答内容をもう少し詳しくお尋ねします。複数回答可。
 a 教職について(非常勤講師, 時間講師を含む) 問10に進む
 b 就職のための自宅待機・準備 問11に進む
 c 楽器メーカー, 楽器店等の音楽教室の講師。問12に進む
 d ホームレッスンを行った。 問13に進む。
 e a-d以外の音楽に関係のある職業(含アルバイト, パート)について。 問14に進む。
 f 音楽に関係の無い職業について。 問15にすすむ。
 g 主婦専業 問16に進む。
 h 家事手伝い
 i 進学・留学した。またはその準備。問17に進む。
 j その他 差し支え無ければ具体的に。「 」
 10-17は該当する質問に答えて下さい。
 10 9-aと回答した人に
 *設置機関はどれですか。 a 公立 b 国立 c 私立
 * 学校種別は。 a 幼稚園 b 小学校 c 中学校
 d 高校 e 大学 f 特殊学校, 学級
 g その他「 」
 * 勤務形態は。 a 常勤・専任(フルタイム) b 常勤と勤務時間がほぼ等しい非常勤, 産休教員
 c 非常勤講師・時間講師
 * 担当科目は。 a 音楽のみ b 主として音楽を担当
 c 音楽と他教科をほぼ同じ割合で
 d 主として音楽以外 e ほぼ全教科
 f その他
 11 待機後の就職先は。 a 教職 b 音楽関係 c a, b以外
 12 教えた科目・種目は何ですか(複数回答可)
 a ピアノ b エレクトーン c 声楽
 d 管楽器 e 弦楽器 f 楽典・聴音
 g 音楽入門 h その他「 」
 * 雇用形態 a 常勤・専任 b 非常勤講師・時間講師
 * 勤務時間 週あたり約「 」日出勤
 週あたり合計「 」時間勤務
 13 主に教えた種目は(複数回答可)
 a ピアノ b エレクトーン
 c 声楽 d 管楽器 e 弦楽器
 f 楽典・聴音 g その他
 *人数は a 5人以下 b 5-10人 c 10-15人
 d 16-20人 e 20人以上 f 30人以上
 14 職種は a 演奏関係 b 楽器店(販売・事務含む)
 c その他「 」
 * 雇用形態 a 正社員又はそれとほぼ等しい勤務時間
 b アルバイト・パート c 自由業
 15 職種は 「 」
 *雇用形態 a 正社員又はそれとほぼ等しい勤務時間

- b アルバイト・パート c 自由業
 d その他「 」
- 16 あなたの気持ちは、いずれに近かったでしょうか。
 a 主婦業に専念したかった。
 b ホームレッスン, アルバイト(含非常勤講師, 時間講師など)の仕事を望んだ。
 c 正社員, 教員(常勤, 専任)などフルタイムの職を望んだ。
 17 質問時点では下記のいずれの状態でしたか。
 a 進学した。学校名, 学部, 専攻「 」
 b 留学した。国名, 学校名, 学部, 専攻「 」
 c 準備中
- 次の質問からは、全員が答えてください。
 18 質問9に回答された内容は、卒業時の第一希望でしたか。
 a はい b いいえ c どちらともいえない
 19 卒業時、教職の選択がもし無条件に可能であれば、教員になりましたか。
 a はい b いいえ c どちらともいえない
 20 卒業時、教職がもし無条件に可能であれば、あなたも赴任する地域・区域を自分で指定することができたとすれば、教員になりましたか。
 a はい b いいえ c どちらともいえない
 21 卒業後の進路を決定するにあたり、あなたが重視したのはなんですか。つぎのなかから三つ以内に丸をつけて下さい
 a 大学で学んだことを生かすことができる。
 b 専門(器楽, 声楽, 作曲)を生かすことができる。
 c 社会的に高い評価を受けている。
 d やり甲斐がある。 g 職場が男女平等である。
 e 安定している。 h 結婚後も続けられる。
 f 収入がよい。
 i 仕事が楽である。
 j 自由になる時間が多く持てる。
 k 気楽である。
 l 自宅で生活できる。
 m 自己実現
 n 教える事がすきだ。
 o 生徒がかわいいという気持ち
 p 結婚して家庭を持つこと(具体的な予定の有無には無関係に)
 22 現在の就業状態についてお尋ねします。(昭和60年6月現在)
 a 有職(正社員, 常勤, 専任またはそれとほぼ等しい勤務時間)
 b 有職(アルバイト, パート, 非常勤, ホームレッスン)
 c 無職
 23 質問の回答内容をもう少し詳しくお尋ねします。複数回答可。
 a 教職(非常勤講師, 時間講師を含む) 問24に進む
 b 就職のための自宅待機・準備 問25に進む
 c 楽器メーカー, 楽器店等の音楽教室の講師。 問26に進む
 d ホームレッスン 問27に進む
 e a-d以外の音楽に関係のある職業(含アルバイト, パート) 問28に進む
 f 音楽に関係の無い職業 問29に進む
 g 主婦専業 問30に進む
 h 家事手伝い
 i 進学・留学 またはその準備。 問31に進む
 j その他 差し支え無ければ具体的に。「 」
- 24-31は指定された質問にのみ回答して下さい。
 24 23-aと回答された方に。
 * 設置機関はどれですか。 a 公立 b 国立 c 私立
 * 学校種別は。 a 幼稚園 b 小学校 c 中学校
 d 高校 e 大学 f 特殊学校, 学級
 g その他「 」
 * 勤務形態は。 a 常勤・専任(フルタイム) b 常勤と勤

愛媛大学教育学部特別教科（音楽）教員養成過程卒業生の就業に関する実態調査

- 務時間がほぼ等しい非常勤、産休教員
c 非常勤講師・時間講師
- * 担当科目は。
a 音楽のみ b 主として音楽を担当
c 音楽と他教科をほぼ同じ割合で
d 主として音楽以外 e ほぼ全教科
f その他
- 25 待機後の予定先は a 教職 b 音楽関係 c a, b以外
26 教える科目・種目は何ですか。(複数回答可)
a ピアノ b エレクトーン c 声楽
d 管楽器 e 弦楽器 f 楽典・聴音
g 音楽入門 h その他「 」
- * 雇用形態
* 勤務時間
週あたり約「 」日出勤
週あたり合計「 」時間勤務
- 27 主に教える種目は(複数回答可)
a ピアノ b エレクトーン
c 声楽 d 管楽器 e 弦楽器
f 楽典・聴音 g その他
- * 人数は
a 5人以下 b 5-10人 c 10-15人
d 16-20人 e 20人以上 f 30人以上
- 28 職種は
a 演奏関係 b 楽器店(販売・事務含む)
c その他「 」
- * 雇用形態
a 正社員又はそれとほぼ等しい勤務時間
b アルバイト、パート c 自由業
- 29 職種は
* 雇用形態
a 正社員又はそれとほぼ等しい勤務時間
b アルバイト、パート c 自由業
d その他「 」
- 30 あなたの気持ちは次のいずれに近いですか。
a 主婦業に専念したい。
b ホームレッスン、アルバイト(含非常勤講師、時間講師など)の仕事望んでいる。
c 正社員、教員(常勤、専任)等フルタイムの職を望んでいる。
31 現在の状態は。
a 進学 学校名, 学部, 専攻「 」
b 留学 国名, 学校名, 学部, 専攻「 」
c 準備中

質問32から、再び全員がご回答下さい。

- 32 質問9(卒業時の進路)の回答と質問23の回答では、選択項目(a-j)に変化がありましたか。
a 変化なし aの回答者は質問33に進む。
b 項目の増減はあったが主たる変化ではない。質問34
c 変化あり(b以外の) 質問36に進む
- 33 雇用状態の変化はありましたか。
a 非常勤、パート等から常勤、正社員、フルタイム労働へ
b 常勤、正社員、フルタイム労働から非常勤、パート等へ
c 変化なし。
* 退職・転職、休業による仕事の中断期間がありましたか。
a なかった(正規に認められた休職、産休・育児休暇)
b 有った。
- 34 プラスされた項目は何ですか。質問23の回答のアルファベットで答えて下さい。「 」
マイナスされた項目はどれですか。同じく質問23の回答のアルファベットで答えて下さい。「 」
- 36 主たる変化の内容を一つだけ選んで答えて下さい。パート、ホームレッスン等も職に含めて下さい。また正規に認められた休職、産休・育児休暇は、転職、退職ととらないでください。
a 就職した。パート、ホームレッスンを始めた。
b 転職・転業した。 c 退職後一年以上経て再就職した
d レッスン、勤務時間数を増やした。
e 退職した。パート、ホームレッスンをやめた。
f レッスン、勤務時間を減らした。

- 37 ご自身の職場の、またはそれに関係のあるクラブ活動、サークル活動、課外活動(いずれも音楽に関する)に携われたことがありましたか。または現在携わっておられますか。
a 過去にある b 今(も)携わっている c 経験なし
- 38 活動内容は
a 合唱 b プラス c 鼓笛隊 d オケ e その他
- 39 職場とは関係のない音楽団体・サークルに参加されていたことがありますか。または現在参加されていますか。
a 過去にある b 今(も)参加している c 経験なし
- 40 活動内容は
a 合唱 b プラス c 鼓笛隊 d オケ e その他

次の質問から、5段階評価でお答え下さい。

- 41 愛大教育学部特音課程で学んでよかったと思っておられますか。
5-----4-----3-----2-----1
強く まあまあ どちら あまり 全く思
思う 思う でもない 思わない わない
- 42 大学で音楽を専攻してよかったと思っておられますか。
5-----4-----3-----2-----1
強く まあまあ どちら あまり 全く思
思う 思う でもない 思わない わない
- 43 大学で主専攻された楽器または声楽、作曲を今でも演奏・練習されていますか。(自宅で又は職場、サークルで)
作曲専攻 5-----4-----3-----2-----1
声楽専攻 5-----4-----3-----2-----1
ピアノ専攻 5-----4-----3-----2-----1
管弦打専攻 5-----4-----3-----2-----1
ほぼ毎日 週に数回 月に数回 それ以下 しない
- 44 ピアノ専攻以外のかたに 今でもピアノを弾いておられますか
5-----4-----3-----2-----1
- 45 愛大特音で学ばれたということと現在のあなたの生活(仕事、家庭、趣味等含めて)は、関係がありますか
5-----4-----3-----2-----1
大いに まあまあ どちら あまり 全く
ある でもない 無い 無い
- 46 愛大特音に過ごされた時代が、その後の人生の基礎となったと感じておられますか。
5-----4-----3-----2-----1
大いに まあまあ どちら あまり 全く感
感じる でもない 感じない じない

回答は回答用紙をお願いします。

ご協力 どうもありがとうございました。